

小学校教師による小6 社会科 “世界の中の日本の役割” の教材研究—1枚の写真を通して

赤道直下の国、エクアドルの森林（下）

作成：矢野越史（やの えつし／兵庫県家島町立家島小学校 教諭）

寸評：山下宏文（やました ひろぶみ／京都教育大学 教授）*

語り：「標高 3,500m のパンアメリカン（北米カナダから南米チリまでを結んでいる高速道路）を走るバスからの眺めです。アンデス山脈の世界一高い活火山「コトパクス（5,897m）」の麓。ここは曇ると 0℃以下になり、霧や雪が降りますが、晴れると 20℃前後まで気温が上がり汗をかくという、何とも不思議な気候です。

写真を見てください。ここには数年前までたくさんの木が生えた森がありました。しかし、薪による国内消費や建材などの国外輸出により、木が大量に伐採されました。同じエクアドル内の熱帯地方では、バナナ園やブラックタイガーエビの養殖池などの拡大等により、熱帯雨林の森林面積も急激に減少しています。

森林には水を蓄える力や、土砂崩れを防ぐ働きなどがありましたね。また、エクアドルでは薪としても重要な役割を果たしています。さらに最近では、二酸化炭素を固定する働きが、地球温暖化防止に大きな役割を果たすと考えられています。だから、

意図（矢野）：エクアドルの森林についての取組みから、森林の働きについて振り返りたい。できれば「森林のメカニズム」にまで内容を深め、「造林」「育林」についても理解させたい。また、「京都議定書」などの取決めから、温暖化防止に対する国際的な取組みや森林の役割を確認したい。そして、開発途上国における「植林」の必要性に迫りたい。最後に、この授業を通して、自分には何ができるのかを考え、実践していくきっかけとしたい。

寸評（山下）：京都議定書では、温暖化効果ガスの削減目標に、「森林による炭素吸収」を算入することが認められ、日本は削減目標 6%のうち 3.9%をそれによって実現しようとしている。また、京都メカニズムによって他の国に出資して削減したのも算入できるようになっている。しかし、こうしたことを小学校の学習で触れることはまずない。本教材を通して、地球温暖化防止に対する国際的な取組みや京都メカニズムなどに発展させていくことが必要である。そして、森林の重要性を地球的規模で考えられるようにしたい。



◀コトパクス火山の麓の車窓

ら、京都議定書という温暖化防止のための国際的な約束では、森林の造成や管理による二酸化炭素の吸収量を、温暖化効果ガスの排出削減量として見なしてもよいということになっているのです。

こうした大切な森林が、エクアドルだけでなく、ほかの開発途上国でも減少しています。このままで、本当にいいのでしょうか？そこで、重要となるのが「植林」です。もう一度、写真をよく見てください。道路の向こうに小さな木がたくさん生えているでしょう。伐採した跡地に針葉樹の苗を植えたのです。今までは、伐りっ放しの所が多かったのですが、現在ではこのような取組みが行われるようになっています。しかし、エクアドルでもこのような場所は、まだわずかだそうです。私たちには何ができるのでしょうか？」

訂正：本誌8月号の「誌上教材研究」に掲載した「エクアドル共和国の林地」の写真は、標高 3,300m 付近であったことが判明しました。お詫びして訂正させていただきます。